



高齢者の肺炎球菌ワクチン接種

大河内 康実（呼吸器内科医長）

冬のインフルエンザ流行に備えて、インフルエンザワクチンの接種が始まっています。同じワクチンのひとつである「肺炎球菌ワクチン」は最近注目されるようになりました。現在、我が国で認可されている肺炎球菌ワクチンには、成人用の23価肺炎球菌ワクチンと小児用の7価肺炎球菌ワクチンがあります。今回は高齢者の肺炎球菌ワクチン接種についてお話しします。



高齢者へ接種が呼びかけられている理由

平成23年の人口動態統計では、肺炎による死亡率は脳血管疾患を抜いて第3位となりました。また、図のように肺炎による死亡率は高齢になるほど急激に増加します。このうち肺炎球菌による肺炎は3割前後を占めると考えられています。また、高齢者ではインフルエンザ感染後の合併症に肺炎球菌性肺炎の頻度が高いことが知られています。そこで、高齢者の肺炎の予防のため肺炎球菌ワクチンが注目されています。

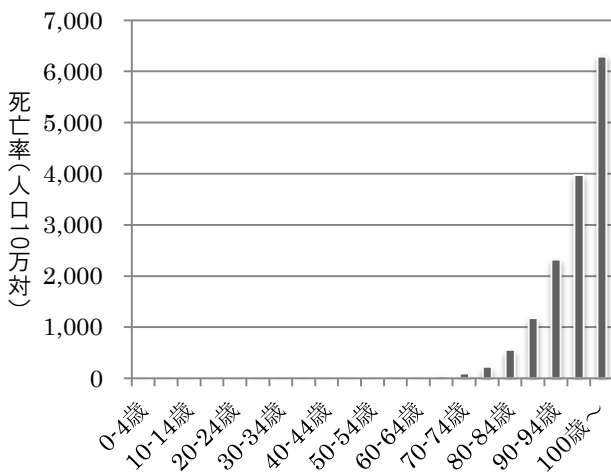


図 年齢別にみた肺炎の死亡率

効果・効能

肺炎球菌には90種類以上の血清型があります。23価肺炎球菌ワクチンは、このうちの23型に対応しているのみですが、流行している肺炎球菌の70～80%をカバーしています。肺炎球菌ワクチンはすべての肺炎を予防するワクチンではありませんが、肺炎球菌性肺炎の重症化を予防する効果があるといわれています。また、ワクチン接種により医療費削減効果が見込まれています。通常、接種後5年間は効果が維持されると考えられています。

インフルエンザワクチンとの併用

インフルエンザワクチンと肺炎球菌ワクチンを併用すると、単独接種に比べて肺炎による入院が減少すると報告されています。肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチンは両者とも不活化ワクチンなので1週間開ければ接種可能です。

副反応と2回目の接種について

肺炎球菌ワクチンの副反応は注射部位の疼痛、発赤、腫脹が主です。稀ですが重大な副反応にアナフィラキシー反応などがあります。再接種時に注射部位の副反応の程度が強くなると報告されていることから、以前は日本では再接種は出来ませんでした。重篤な副反応ではないことから、平成21年10月から海外と同様に初回接種後5年を経過したら再接種ができるようになりました。

ご希望の方は予約して来院ください

肺炎球菌ワクチンは脾摘患者の肺炎球菌性肺炎の予防には保険適応がありますが、それ以外は全額自費となります。全国の約半数の自治体で肺炎球菌ワクチンの接種費用に対する公費助成が行われるようになり、本年から新宿区でも①65歳以上のかたと②60歳～64歳で心臓・腎臓・呼吸器・免疫機能に重度の障害があり、接種を希望する方（②の患者さんは区に申し込みが必要）に肺炎球菌ワクチンの一部助成が始まりました。薬は十分ありますが、確実にご対応するため、肺炎球菌ワクチン接種をご希望のかたは電話で予約して来院ください。